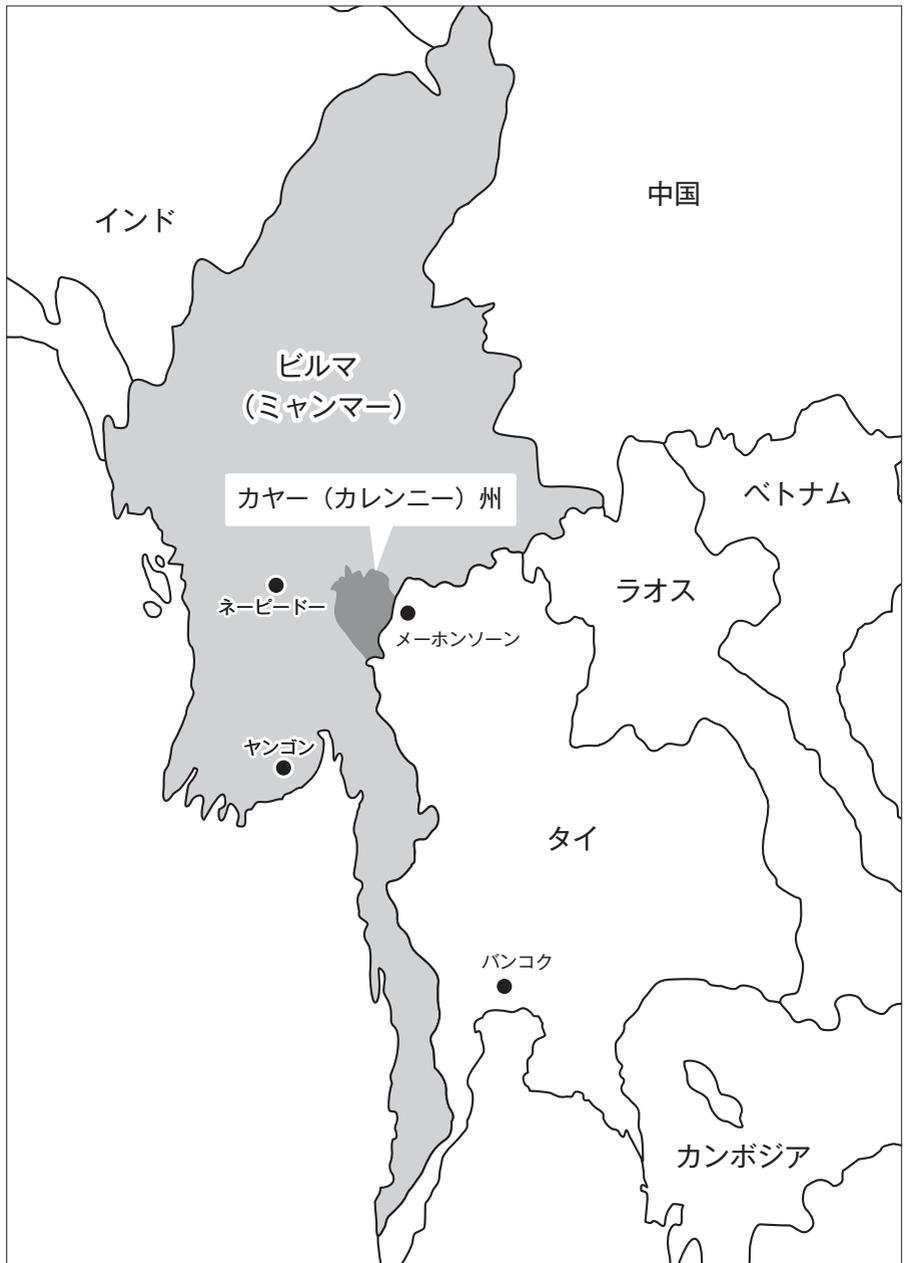


# 人類学の難民

タイ・ビルマ国境の  
カレンニー難民の移動と定住

久保 忠行

清水弘文堂書房





タイ・ビルマ国境の難民キャンプ

## 凡例

- 一 本書では読みやすさを考慮して、現地語はすべてカタカナで表記する。断りがないかぎり、カタカナで表記される現地語はビルマ語である。
- 二 本書で言及する人名は、公の立場にある者を除いてすべて仮名である。カヤー名の敬称「クー」、シャン名の敬称「サオ」、ビルマ名の敬称「ウー」「ドオ」などは省略した。
- 三 本書では民族としての「ビルマ」のみビルマ族と表記する。その他の「カレン」、「カレンニー」、「カチン」、「シャン」などには「人」や「族」をつけない。
- 四 調査期間をとおして為替レートは変動したが、一タイ・バーツは三円として計算する。
- 五 主要な国際機関や組織名などは、初出時に英語名を併記する。

# 緒言

## 問題の所在

筆者がはじめて難民と出会ったのは、二〇〇一年にタイを訪問した時のことである。はじめての海外旅行で友人とともに、タイ北部メーホンソン県にある「首長族」観光に出かけた。半年後に観光村を再訪した際、たまたま村に隣接する集落にも足を踏み入れた。観光村とは比べものにならないくらい大規模な集落で、村のようなのどかな空気を醸し出しているように見えたその場所が、カレンニー難民キャンプであった。

これをきっかけとして、筆者とカレンニー難民とのつきあいはじまった。この時にはじめて難民という言葉を意識するようになった。彼らの出身地を見てみたいと思ひ、同年にビルマを訪問し道中でビルマに関する本を読み、民主化の問題や、内戦で少数民族が迫害をうけていることなどを知った。

修士課程に進学し、再び彼らのもとを訪問して気がついたことがある。彼らは、自分たちがいかに虐げられてきたのか、どんな困難に直面しているのかを、時に流ちょうに私や支援者にアピールする。「ビルマ軍は酷い」「キャンプには職がない。移動の自由もない」「故郷には帰れない」「援助を頼りにする生活はよくない」という声を何度も耳にした。なかには外国人の扱いにも慣れていない人もいて、聞いてもいないのに、どんな大変な目にあっているのかを臆することなく語ってくれる。それは、それだけ多くの人が共通して直面している事態でもあるからだ。

「迫害される少数民族」が難民になるといふ図式は、書物から学んだものと一致する。そうした話に触れるたびに、まるで自分が歴史の証人になったような気になり、背筋が伸びる思いをした。

しかし、困難な経験を自ら語る「迫害される少数民族」に出会うたびに、違和感を覚えることもあった。それは、まるで迫害の経験が定型化されているのではないか、というものである。筆者は、彼らが嘘をついていると疑うわけでも、そうした証言が信頼できないというわけでもない。この違和感は、迫害される難民という負のレッテルを難民自身が引きつけ、再生産しているかのように思わせたことによる。難民に無力さがともなうことには違いはない。しかし、それを主張するという行為に、人間が生きるうえでのだくましさを感じるとともに、一般的な難民

イメージでは難民を適切に理解できないのではないかと考えるようになった。違和感は、村のように平穏にみえるキャンプと、彼らのいう「困難」とが、実感としてうまく結びつかなかったからでもある。

もちろん、こうした筆者の第一印象には誤解もあった。誰もが「主張する難民」ではなかったし、キャンプには一見するだけではわからない特有の問題がいくつもあるからである。それでも、迫害の側面だけで難民を理解できるわけではない。この点は、先行諸研究でも指摘されている。世界の難民のなかには、たとえばパキスタンに逃れたアフガニスタン難民のように、難民 (refugee) と呼ばれることを拒否する人びとが少なくない [Shahran 1995]。難民という呼び名が忌避されるのは、この言葉が無力さや受動性というネガティブな意味を含んでいるからである。本書が対象とするカレンニー難民について、筆者が調査をおこなう十年前の一九九八年に調査をしたサンドラ・ダドリーも、若い人びとは、難民 (refugee) という呼び名ではなく、革命家 (revolutionarist) を自称し、そう呼ばれることを好むと報告している [Dudley 2000:139, 2010:44]。このように、当事者のなかには、難民というラベリングを拒否する動きがある。

タイの難民キャンプをはじめとし、世界各地で暮らすビルマを出身とする難民たちは、自身をさして、ビルマ語で「ドウツカーデー」と呼ぶ。「ドウツカー」とは仏教用語が起源で、「苦しみ」を意味する。ドウツカーデーは、災害に見舞われた人、苦難を味わう人、困った人をさし、転じて難民という意味になる。つまり、犬にかまれて「大変だ」ということも、お金がなくなつて「苦勞する」ことも、災害に巻き込まれて「途方に暮れる」ことも、軍に村を破壊されて「苦境に陥る」状態も、すべて「ドウツカー」なのである。彼らは、自身をドウツカーデーという指示対象のひろい単語で呼ぶことで、難民としての立ち位置を認識し表明しているのである。

タイ・ビルマ国境で暮らす難民のなかには、英語のレフュジリー (refugee) という呼び名を否定する人はいても、「ドウツカーデー」としての自身が置かれた立場を否定する人はいない。何らかの困難を抱えているという事実は、事実としてあるからである。ときに彼らは「ドウツカーデー」であることを流ちょうに語り、主張する。そこでレフュジリーという呼び名を否定するからといって、彼らは「自分たちは難民ではない」といつているわけでも、難民

であるという事実から目を背けようとしているわけでもない。難民はあくまで難民であるという点は、人類学者が「難民の主体性」を安易に評価できないことを示唆している。問題は、難民というラベルが突きつける固定観念である。そこで、本書では難民というラベルの意味を検討しつつ、当事者が難民であることを受容し、ときに利用しながら生きる姿を明らかにする。

### ビルマとミャンマー

本書が研究対象とするのは、ビルマ隣国のタイ北西部のメーホンソン県に居住するカレンニー（赤カレン）難民である。カレンニー難民の多くは、ビルマのカヤー州を出身とする。本書では、難民出身国の呼称について基本的にビルマをもちいる。それは次の理由による。

まず、難民として暮らすインフォーマントが、ビルマと呼ぶことにならうからである。彼らは、英語でバーマ（Burma）といったり、ビルマ語でバマーといったりする。その際、ビルマという呼称には反政府的な意味あいを含むこともあれば、含まないこともある。この政治的意味あいの背景には、ビルマからミャンマーへの「国名変更」にかんする以下の歴史的経緯がある。

一九八八年の民主化運動を武力で弾圧し暫定政権を敷いた軍事政権は、一九八九年、英語の対外呼称を Union of Burma（ビルマ連邦）から Union of Myanmar（ミャンマー連邦）に変更することを発表した。政府は変更理由を「ビルマでは、多数派のビルマ族しかささないの、ミャンマーの方が多民族国家の名称にふさわしい」と説明した。一方で、民主化を求める人びとは、クーデターで政権の座についた軍の独断による国名変更を認めなかった。このため政権の正当性を認めないという意味でもミャンマーではなくビルマを意識的に使う。ビルマかミャンマーかは、政治的立場を示す「踏み絵」のようになっていた。

この二項対立の構図を紐解くには、次の事実に着目する必要がある【1】。それはビルマとミャンマーには、口語

(バマー)と文語(ミャンマー)の違いは、歴史的にどちらも多数派のビルマ族だけをさすことである。また英語の対外呼称を変更したタイミングで、ミャンマーという呼称が国名に使われはじめたわけでもない。たとえば、独立時からビルマ語の国名は、「ピダウンズ(連邦)・ミャンマー・ナインガー(国)」であった。つまり、これはビルマ「か」ミャンマーかの二者択一の問題ではなく、ビルマ「と」ミャンマーの関係にある。したがって、ミャンマーの方が多民族国家としてふさわしいという政府の説明は誤りである。本書でビルマをもちいるふたつめの理由は、この虚偽を認めないという立場からである。ビルマについて書かれた書籍や文献のなかには、ビルマという呼称が反政府的な響きをもつことから、呼称の問題は棚あげにしてとりあえずミャンマーとするという説明のされ方がある。しかし、そういった政治的中立性を装った説明の仕方こそ、政治に絡め取られてしまっているといえないだろうか。

本書でビルマという呼称を使用する三つめの理由は、そもそも変更されたのは英語の対外呼称だからである。非英語圏で暮らす私たちは、それぞれの言葉で互いの国を呼びあう。タイ人や中国人や韓国人が日本をジャパンと呼ぶことはないし、日本人がタイや中国や韓国を英語名で呼ぶことはない。同様に、ビルマという日本語で該当国を呼べばよいのではないだろうか。日本でミャンマーという呼称が使われるようになったきっかけは昭和天皇の葬儀であった。軍事政権の首脳クラスが出席することになり、外務省の意向をうけた日本新聞協会が「ミャンマー」表記を採用し、各社ともそれに右ならえをってしまった経緯がある。

ただし、ミャンマーという表記に統一したメディアの影響もあり、いまやビルマよりもミャンマーの方が通用している現状もある。これは日本だけではなく、ビルマ国内でもみられる傾向のようである。そもそも、ビルマもミャンマーも同じ意味の呼称である。日本語や現地での定着度合いと政権の変化に応じて、ミャンマーも違和感なくもちいられるようになれば、筆者もミャンマーという呼称をもちいるだろう。呼称の問題は軍政による抑圧とそれへの抵抗を象徴してきた。もし呼称がひとつに統一されることがあるのなら、そのときにこそ、同国の民主化が実現したといえるのかもしれない。

## 本書の狙いと構成

国連難民高等弁務官事務所 (United Nations High Commissioner for Refugees、以下UNHCRと表記) の「グローバル・トレンド」報告書によれば、世界の避難民数はここ五年間で四千二百万人と高い水準を推移している。二〇一二年末時点で世界の難民・国内避難民総数は四千五百二十万人で、一九九四年以来最多を記録している [UNHCR 2013]。レッシャーらによれば、世界の難民の三分の二以上が難民状態が五年以上継続する長期化難民状態にある [Loescher et al. 2008:3]。ビルマはアジア地域のなかでも有数の難民流出国で、国境を接するタイとバングラデシュに難民キャンプがある。タイに難民キャンプが公式に設置されたのが一九八四年、バングラデシュ側に多くの難民が流出しはじめたのが一九七三年で、現在も難民キャンプの解消には至っていない。ここ数十年間のビルマの歴史は、難民流出の歴史でもある。

UNHCRは、長期化した難民問題の解決策として、第三国定住 (resettlement)、避難先の地域社会への統合 (local integration) と難民の自主的な帰還 (repatriation) の三つの方向性を打ち出している [国連難民高等弁務官事務所 2010:3]。この三つの解決策は、いずれも国家から排除された難民の国家への再統合をさす。第一章で詳述するように、人類学の分析概念で難民状態は、再統合の前段階の〈過渡〉の移行期として分析される。本書では、通過儀礼にみられる〈分離〉〈過渡〉〈再統合〉の図式のアナロジーとして、国を離れるプロセスとしての〈分離〉、難民状態としての〈過渡〉、そして再び国家に包摂される〈再統合〉として状態の移行をとらえる。

本書では、この三つのプロセスを射程にいれて、難民の移動と定住を明らかにする。ただし、本書では〈分離〉から〈再統合〉へという単純な移行を論じるのではなく、複数の国家の国境をまたぎ、国際的な支援が提供される難民が生きる世界の複合的な状況を明らかにする。『難民の人類学』と名づけた本書では、〈分離〉〈過渡〉〈再統合〉の三つのプロセスを三部構成で論じる。

「第一部 越境する難民」では〈分離〉のプロセスを明らかにする。「第一章 難民研究の視座」で、難民を分析す

るための視点を提示する。「第二章紛争と難民の越境」では、出身国ビルマの内戦史とともに、個々人の越境と難民キャンプ形成の歴史的プロセスを明らかにする。「第三章難民キャンプの社会空間」では、難民受入国タイの難民政策とキャンプの管理体制を明らかにする。ここでは、受入国の方針と、難民と支援の関係を明らかにする。

「第二部 難民として生きる」では〈過渡〉の状態を明らかにする。「第四章 難民の生活世界」では、日々の暮らしの側面から国家や支援機関による一元的な管理の視点ではとらえきれない難民の実態と、キャンプを越えた生活世界の広がりについて論じる。「第五章 故郷とのつながり」では、難民キャンプでの伝統行事の復興をおおして、キャンプと故郷との連続性について考察する。「第六章 難民の帰属意識」では、タイ、ビルマのいずれの国家にも属さない難民の帰属意識と自己肯定の源泉について考察する。第二部では、難民が一時的な〈過渡〉の状態にありながらも、難民キャンプに根づいていく動態を文化的実践と帰属意識の側面から明らかにする。

「第三部 国民国家のなかの難民」では、〈再統合〉のプロセスを明らかにする。「第七章 庇護国で暮らす難民」では、カレンニー難民を構成するひとつの民族であるカヤンに焦点をあてる。「首長族」として知られるカヤンがタイでの観光をおして定住する点を明らかにする。「第八章 第三国への再定住」では、難民キャンプから米国へ再定住した難民の定住過程を論じる。「第九章 難民帰還の可能性」では、ビルマの民政移管後の難民の帰還をめぐる状況について論じる。第三部では、難民問題の「解決策」としてあげられている、地域社会への統合、第三国定住、帰還の三点からアプローチをする。ここでは〈再統合〉を〈分離〉と〈過渡〉の難民経験との連続性から明らかにする。

本書ではビルマを出身とする難民のなかでも、カレンニー難民に着目する。カレンニー難民は、人口約六千万人を有するビルマでもっとも小さなカヤ州（推定人口三十万人）を出身とする難民である。そのうち約二万四千人がタイの難民キャンプで暮らしている（調査当時）。世界の難民・避難民の規模、あるいはビルマ全体からすると、相対的にはマイナーな事例にうつるかもしれない。しかしカレンニー難民の事例は、〈分離〉〈過渡〉〈再統合〉のプロセスとともに、三つの解決策を同時に射程にいれることができる好例である。

本書で提示する資料は、二〇〇四年四月～二〇〇五年五月、二〇〇七年七月～二〇〇八年一月、二〇〇八年二月～二〇〇八年七月、二〇〇九年三月、二〇一一年八月にタイで実施した現地調査と、二〇一二年八月～九月にかけて米国で実施した現地調査、二〇一三年九月にタイとビルマで実施した現地調査によるものである。

1 呼称問題に関する議論の整理は宇田 [2010:12-15] を参

照。また、既刊の文献や新聞記事で、呼称問題に言及している箇所を引用した資料として、以下を参照。

「ビルマかシヤンマーか」 [Yuzo's Photo World] [http://](http://www.uzo.net/notice/quo/b_m.htm)

[www.uzo.net/notice/quo/b\\_m.htm](http://www.uzo.net/notice/quo/b_m.htm) (最終アクセス日 :

二〇一三年一月二十九日)

# 目次

緒言

5

目次

13

第一部 分離——越境する難民

19

第一章 難民研究の視座

21

一 はじめに 22

二 難民とは誰か 23

三 難民の境界性 26

四 難民性 33

第二章 紛争と難民の越境

39

一 多民族国家ビルマ 40

二 カレンニーの政治史 46

三 軍事政権と難民 52

四 難民の越境 57

五 難民キャンプの形成 64

第三章 難民キャンプという社会空間

71

一 タイの難民政策 72

二 難民キャンプの管理体制 79

三 開発志向の支援と難民 91

四 「不信」の生成 97

## 第二部 過渡——難民として生きる

111

## 第四章 難民の生活世界

113

一 衣食住 114

二 社会関係の広がり 122

三 難民としての経験 134

四 内側から創られる難民 145

## 第五章 故郷とのつながり

155

一 信仰・宗教・伝統文化 156

二 新規難民の流入と「伝統」の創造 167

三 復興行事 172

四 故郷との連続性 186

## 第六章 難民の帰属意識

197

一 武装闘争の戦略 198

- 二 抵抗運動の帰結 207
- 三 範疇をめぐる現実 214
- 四 難民の帰属意識 226

### 第三部 再統合——国民国家のなかの難民

#### 第七章 庇護国で暮らす難民

- 一 観光と紛争 236
- 二 難民観光の舞台裏 242
- 三 自文化との向きあい方 255
- 四 難民のタイへの定住 265

#### 第八章 第三国への再定住

- 一 第三国定住 274
- 二 二次移住と集住化 277
- 三 越境の民族誌 286
- 四 故地との結びつき 296

#### 第九章 難民帰還の可能性

- 一 ビルマの「民政移管」をめぐる  
308
- 二 停戦交渉 310

- 三 難民帰還の可能性 317
- 四 「民族」紛争の行方 319

## 結語 難民の移動と定住

- 一 難民研究の視点 328
- 二 〈分離〉…国民国家と難民 329
- 三 〈過渡〉…難民の転地と定地 331
- 四 〈再統合〉…〈過渡〉との連続性 335

## あとがき

## 参考文献